

2019. 2. 17. 降誕節第8主日礼拝式説教

ダビデ王物語講解説教

聖書：サムエル記下24章,

『祭壇を築く』

小説や映画の終わり、終わり方というのは大事なものです。ハッピーエンドというか、めでたしめでたし、という終わり方は「こんなうまくいくのか」と思いつつも座りがよく、読み終わった後、見終わった後、胸をなでおろすものです。

水戸黄門のような番組が長く続いたのも終わり方に理由があるのかもしれませんが。逆に、終わり方がハッピーエンドでもなく、エッこれで終わりなの、という終わり方だと、もやもやのようなものが澱のように溜まるのです。しかしまた逆にその不自然ともいえる終わり方が読者や観客にいろいろなことを問いかけてくるということもあるわけです。

今朝はサムエル記の最後の個所を読みました。ダビデ王物語は列王記に場所を移して尚少し続くのですが、サムエル記としてはここが最後。しかし、なんとも不思議な、よくわからない最後、という気がします。ダビデ王のようなイスラエルの歴史に残る人物の最後を描くのに、その偉業をたたえとか、しあわせな晩年だった、というようなことは何も書かれておらず、まさに澱が残るような不思議なことが書かれているのです。

24章は神がイスラエルに対して怒りを燃え上がらせておられた、ということから始まっています。けれども、いったい何に対して、神さまは怒っておられたのか、何一つ書かれていない。説明もない。そういう中で、神さまはダビデに対して人口調査をするよう誘った、いざなったのです。ところがその神さまの誘いで人口調査をしたダビデが、心に呵責を感じ、重い罪を犯しました、と告白し、神さまは罰をお与えになった、というのです。何とも奇妙な話です。神さまの方で、人口調査をするようにと誘っておきながら、いざダビデが実行すると、罰するのですから。

しかも不思議なことに、人口調査をする際、ダビデの側近であったヨアブがそれに難色を示している。躊躇している。だが、ダビデは調査を命ずる。

ヨアブはやむなく引き受け、結果を報告する。その直後、ダビデは心に呵責を感じ、重い罪を犯したと自覚しているのです。その理由も書かれていないのです。まずゆっくり考えてみると、すでにイスラエルの神さまに対して、怒りを買うようなことをしていた。その中で人口調査をしなさいといういざないがあった、それ自体が試みだった、と受け取れます。どういうことかといえば、十字架を前にして主イエス・キリストはペトロにこう言われたことがありました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。だがわたしはあなたのために信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」そしてペトロに対してあなたは三度わたしは知らない、というだろうと予告する場面です。あのとき主イエスはペトロにあなたはサタンによる誘惑に遭うだろう、と言われたのです。逆に言えば、主イエスはそのサタンによる誘惑を取り除いたり、サタンの攻撃そのものを退けようとはしませんでした。退けるのではなく、むしろその誘惑を受け、その誘惑に敗れても、敗北することの中で主の恵みと支えを受けるようにと、ペトロを導いたのです。この世界からサタンはいなくならない。そんなことは誰もできない。それは人間の自由ということと深く関係していることです。わたしたちは誘惑と聞くと、すぐ悪いこと、と受け取ってしまう傾向があるけれど、人間はこの世で歩む限り、いつでもサタンの誘惑と隣り合わせ。どんな瞬間もサタンの誘惑の中にある。キリストご自身、サタンの誘惑を受けて歩まれたのです。つまり、神もその誘惑を認めておられるということです。ダビデはここで、神からの誘惑を受けたのです。神は怒っておられた、その中で、さらに試みを与えたというのです。人口を調査することの何が誘惑なのか。結論としてはわからないのですが、例えば人口調査というのは、王にとって力の誇示、自分が戦争に勝って領土を広げた、人口が増えた、それらは自分の力の誇示につながっていました。人口調査そのものが罪ということはないでしょう。しかしそこでダビデの心の中で起こったことは人には見えなくとも、誘惑に陥る何かがあったのです。ダビデは最晩年になって、自分のしたこと、自分が王として実現してきたことを振り返ることもあったでしょうが、その中で自分の力を誇示するということが繰り返し頭を擡げてきたのではないか。

ダビデ王はサウルから受け継いだ王国を北と南の統一国家としてその基

礎を固め、領土を広げ、人口を増やし、国力を増強させた。目に見える成果もたくさんあった。戦争行為は、勝ち負けがはっきりしており、勝てば勝つほど、ダビデの功績になったでしょう。まさに偉大な王と呼ばれる王だった。

しかしそのことはまさに彼にとって、一つの大きな誘惑の源だった。王として彼が成果を上げることはもとより望ましいことであり、彼の仕事でもあります。しかしそこに絶えず誘惑があった。あえて言えば、どんなことをしても、それは誘惑と背中合わせになっていった。別に人口調査に限らない、すべてのことが誘惑の入り口になったのです。ダビデは晩年を迎えても、まさにその誘惑の入り口の前で右往左往する一人の人間だったのです。

ダビデは預言者ガドから、ダビデの罪の罰として三つのことを示すから、そのうちの一つを選ぶようにとの神の言葉を聞きます。その三つは七年に及ぶ飢饉、三カ月の間敵に追われること、三日間疫病が猛威を振るう、とどれも選ぶことのできないようなものでした。ダビデは神に委ねるほかになく、神の御手の中で苦しみ、そこで倒れることになってもいいと判断します。

ダビデの罪に対する罰が与えられ、結果多くの人なくなります。神はエルサレムまでも滅ぼされようとしたが思いとどまられた、とあります。ダビデは罪を犯したのはわたしであって、羊の群れではない、イスラエルの民ではない。だから罰するのであれば、わたしとダビデ家の上にくだしてほしい、と訴えます。人間の罪の重さ、それがどれほどの罰に値するのか、わたしたちはよくわかっていない。ダビデの犯した罪で、多くの人死に、なおエルサレムも滅ぼそうとされた、というのですから、驚きます。しかし、わたしたちが犯してきた罪の重さも、ダビデに比べて軽いわけではないのです。イエス・キリストの十字架によってその罰を担っていただいたのですから。ダビデは自分の罪の重さをあらためて、痛切に感じることになります。この羊には何の責任もない。責任があるのはわたしだ、という叫びは痛切です。

自分の罪の重さを、人生の終わりに近づいているところで知るということは、ダビデに限らない、人間にとって何ともやりきれないものだと思います。

ダビデは預言者ガドの言葉に従い、主のための祭壇を築くことにします。祭壇を築き、民を疫病から救うよう神に祈りたいと願うのです。ダビデは自分の土地を提供しますというアラウナの言葉を退け、買わせてくれ、といってその土地を買い、祭壇を築き、献げものをします。自分の責任を自分を負

いたいという気持ちが土地購入にも表れているのです。

ここには、自分の罪のために人生の最後に至るまで、引きずり回されている人がいます。自分のために多くの人が犠牲になるほどの罪の重さ。わたしたちもわからないなりに、この罪の重さを思うのです。神の独り子が十字架にかかるほどの罪を犯しているのですから。そしてその罰はわたし自身にくだしてほしいと祈りつつ、苦しむもののために、自分自身の責任において祭壇を築き、祈りをささげ、犠牲の献げものをし、神に必死に祈るダビデがいるのです。

ここには穏やかな晩年の日々を送るダビデはいない。王として数々の功績を積み上げて、その信仰において円熟期を迎えている老いたダビデがいるのではない。自分の罪に右往左往する一人の人間いる。齢を重ねたというのに、その信仰において円熟というようなこととは無縁で、誘惑の中で、いとも簡単に翻弄されて、多くの犠牲を伴うような罪を犯してしまう、そういう一人の人がいるのです。しかしダビデはその自分の罪を神の前で告白し、赦しを乞い、神からの罰を受け、なお神に祈り続け、祭壇を築き、赦しを願う献げものをささげ、神と向き合っていく。それがダビデの晩年の歩みの出来事だとサムエル記は記すのです。サムエル記の著者はかつて美しい青年だったダビデを語りました。その著者はサムエル記の最後で、自分の罪に苦しむ一人の人間を描いて、この書物を終わろうとしています。人は死ぬまで、自分の罪に翻弄される、けれど、その人間は神の御手の内にある。御手の内にあるということは、すべてうまくいくとか、自分にとって都合よく事が進むということではない。神の怒りもある、神からの試みもある、そして罪に対する神のさばきもある。そして人間に対する赦しもある。その全部を含め、神の御手の内にある。サムエル記の著者はわたしたちにそのことを語ろうとしているのです。

D a t a : 降誕節第8主日礼拝説教

讃美 : 前513、後516

新生教会礼拝堂